

清水 泰 著

增訂
堤中納言物語評釋

株式會社
京都印書館刊

清水 泰著

增訂
堤中納言物語評釋

株式會社
京都印書館刊

昭和二十六年二月五日印刷
昭和二十六年二月十日發行

增訂 堤中納言物語評釋

定價 二百五十圓

作者 清水 泰

行者 志水 一之助

刷者 三共社印刷所

發行所

株式會社
京都印書館

京都中京區押小路西馬場東入
一丁目二〇七番上四一九九番
振替口座京都二四九五五番

緒言

堤中納言物語は、我が國短篇小説の鼻祖であると古くから傳へられて來た。けれどもその研究は、作者成立註釋等いづれの方面もいまだ殆んど究明されてゐない有様であつた。かつて自分分はこれらの方面において、いさゝか學界に貢獻し得たことを喜ぶものであるが、かへりみればそれは早やふたむかしの過五月三日、六條齊院家で資料の發見もあり、作者についても一部分明らになつた點もある。小式部の作であることをのうち天喜三年五月三日、六條齊院家で行はれた歌合の記事中、堤中他によると、大學頭東宮ぬ權中納言」は小式部の作であることを明示してゐる文献が發見され小式部は後朱雀天皇の皇撰作者部類その他によると、大學頭東宮學士大和守藤原義忠の文であつたことがわかる。又作者部類によると小式部は後朱雀天皇の皇女祐子内親王家の女房とある。

堀部正二氏は「襟子内親王家女房のやうに思はれる」といつてゐる。襟子内親王は祐子内親王の御同妹にあたる。とにかく「逢ふ坂越えぬ權中納言」だけは、天喜三年頃の成立であらう

ことは明らかになつた。そして作者も小式部といふ女である。その他のものについての作者成立問題は、今のところ不明である。なほ成立に關しては堀部氏の「中古日本文學の研究」中の所説を參看されたい。このたび、増訂堤中納言物語評釋上梓にあたつて一言しるしてはしきとする。

昭和二十五年十月十五日

著 者

増訂 堤中納言物語評釋

目次

花櫻折る少將……………一

このついで……………二一

蟲めづる姫君……………三五

ほどくの懸想……………六三

逢坂越えぬ權中納言……………七七

かひあはせ……………一〇一

思はぬかたにとまりする少將……………一二三

はなだの女御……………一四九

はいずみ……………一七七

よしなしごと……………二〇三

附 録

堤中納言物語考……………二二一

語句及和歌索引

増訂 堤中納言物語評釋

清水泰著

花櫻折る少將

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむ所いとほしけれど、立ち歸らむも遠きほどなれば、やう／＼行くに、小家などに例音なふものも聞えず、隈なき月に、所々の花の木どもも、ひとへに混ひぬべく霞みたり。今少し過ぎて見つる所よりも、おもしろく過ぎがたき心地して、

そなたへと行きもやられず花櫻にはふ木かげに立ちよられつゝ

とうち誦じて、早くこゝに物言ひし人ありと、思ひ出でて立ち休らふに、築地の崩より、白きものの、いたう咳きつゝ出づめり。衰れげに荒れ、人氣なき處なれば、此所彼所のぞけど咎むる人なし。このありつる者を喚びて、「此所に住み給ひし人はいまだおはすや、やま人に物聞え

むといふ人あり、とものせよ。」といへば、「その御方は此所にもおはしませず、何とかいふ處になむ住ませ給ふ。」と聞えつれば、あはれの事や、^(九)尼などにやなりたるらむと、後めたくて、「かのみつとをに逢はじや。」など、ほゝゑみての給ふほどに、妻戸をやはら^{かい}搔放つ音すなり。

(考異) (一)いとほしけれど いとほしければ信友校本。(二)立ち歸らむる邊き 立ち歸らむ邊き阿波國文庫舊藏本。(三)そなたへと そなたへは舊井本。(四)木かけに立ちよられつつ ほかけにたびたれつつ信友校本、とかげにたびたれつつ宗廟自筆本。(五)早くこゝに 早くこゝに 信友校本。(六)立ち休らふに 立ち休らふほどに三高本。(七)哀れげに宛れ 哀れげに阿波國文庫舊藏本書入。(八)このありつる若を喚びて このありつる若の返よびて阿波國文庫舊藏本。(九)尼などにやなりたるらむ 尼などになりけるらむ三高本。

【通釋】 さやかに照りくる月影にだまされ、明けゆく光と思ひ違へて、まだ夜も明けぬのに、少將は女の許を出てしまつたが、女はどう思つてゐるだらう、自分を嫌つてこんな早く歸つたのだと思ふかも知れぬ。

斯う思ふと可愛想ではあるけれど、これほどまで来て今更後戻りするのでも遠いことであるから、そのまゝ家路をさして歸るのであつた。その邊の小家などからいつもは聞える物騒がしい音もまだしない。あちらこちらに咲いてゐる櫻の木なども、限なき月光を浴びて全く霞と見まがふ許りである。道すがら見て來た所よりも立ち勝つて美しい景色に、行き過ぎがたい心地がして、

そなたへと行きもやられず花櫻にほふ木かけに立ちよられつつ

と口吟んで、しばらく佇んでゐる中に、嘗て戀にしてゐた女が此所に住んでゐたことを想ひだして、訪ね

ても見ようかどうかしようとためらつてゐると、築地の崩れたところから、白衣の人がひどく咳拂ひをしながら出て来る様子である。物淋しく荒れはて、人のゐるけはひもないところだから、少將はそこへと覗き見をしたが誰も咎める人もない。さきの白衣の者をよびとめて、「此所に住んでゐられた女はまだおいでだらうか。仙人に用事があると言つてゐる人があると御傳へして貰ひたい。」といふと、「その御方は此處にもおいでになりません。何處やらいふところに御住ひですが。」と答へたので、可愛想に尼にでもなつたのだらうかと思ふと氣がかりになつて、「若しやあの光遠には逢ふまいか。」など微笑しながら言つて居られると、妻戸を靜かに開け放つ音がする。

【語釋】 月にはかられて云々 はかられてとはだまされての意。女の許に宿つた男が、月光の明きにだまされて、夜が明けかゝつたのだと思ひ、まだ夜深いのに起き出でゝしまつたものゝ、といふ意。○思ふらむ所いとほしけれど、思ふは女の思ふのである。○立ち歸らむも遠きほどなれば 立ち歸るはもどる意、たちは接頭語。女の家に戻るのも道が遠いからして。○小家などに例音なふものも聞えず 音なふは音なすの意、音のすること。源氏夕顔の巻にも、ほのゝと明けゆく空に、白たへの衣襟つ砵の聲、こほくと鳴り轟くからうすの音、又は賤の男共の管みに關した話し聲などの騒々しい様を叙してあるが、かうしたいつもの音も夜明に遠いのでまだ聞えない。といふのである。○今少し おもしろくにかゝる語。○そなたへの歌 花櫻の美しく咲き匂うてゐる木かげに引きつけられて、とても素通りにして向ふの方へ行きすぎてしまふことは出来ない。○そなたへと行きもやられず この美しい櫻を見すて、向ふの方へ行きすぎて行くことは出来ない。○花櫻 單に櫻花の意に用ゐてある場合も古歌などに多く見るところであるが、花櫻といふ一

品種がある。古今六帖にも山櫻、緋櫻、かには櫻などとともに花櫻の題名で數首の歌が出てゐる。重瓣で淡紅色の花を開く。貫之集に「雨降らば色さりやすき花櫻うすき心も我れ思はななく」とあり、又源氏幻の巻に「外の花は一重散りて、八重咲く花ざくら盛りすぎて」などとある。○立ちよられ 引きつけられて自然によられるのである。○早くこゝに

物言ひし人ありと思ひ出でて 以前情を通過してゐた女が此所にゐたことを想ひ出して。物言ふは字の如く解する場合もあるが、男女の情事にいふ。○立ち休らふ やすらふに同じ、た

めらふ、逡巡すること。上文の「うち誦じて」「思ひ出で、」何れも

立ち休らふへかけて説くべし。

○築地 築泥ついでの略。泥土を築き上

げて作つたもので今の土手のやうな塙である。それ故くづれ易いのである。今も京都地方に見かけるものである。大鏡伊尹の傳中、花山院の風流におはしますことを書いた條に「撫子の種を、ついぢの上にかかせ給へりければ、思ひかけす四方に色々の唐錦をひけるやうに云々。」などある。後世は練堀の屋根などあるものなにもいふ。

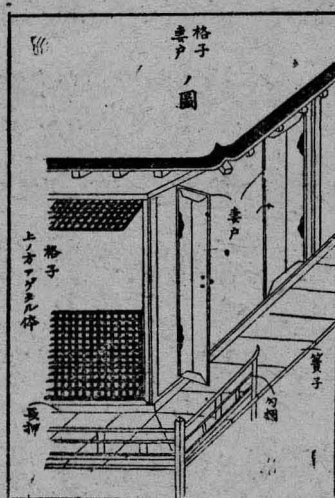
○白きもの 白い装束を着た人。白丁はくぢょうを着た下部であらう。○しはぶきつゝ出づめり 暖拂ひしながら出て来るらしい。めりは推量の助動詞。○このありつる者 築地のくづれから出て来た白装束の人をさす。○やま 荒れて人氣もな

い淋しい所故、洒落やまびとて仙人といつたのである。

○物聞えむ 物申さむの意。聞ゆは言ふの敬語。

○物せよ しかゝ

の由を傳へて下さいの意。すべて動作をなすを物すといふ。○あはれの事や云々 あはれのことや、はあはれのことよ



の意。後めたくて、は氣が、りでの意。後めたしの語によつて少將が女を捨てたのであることがわかる。○かのみつとをに逢はじや みつとを(光遠か)人の名である。少將は女を捨てたことに對して、後めたく思つたけれど、でもあの光遠には逢ふまいか、多分光遠と一緒にゐるだらう、と自ら辯護して慰めてゐるのである。光遠も少將の通つてゐた頃の懸想人であつたのだらう。校註堤中納言物語には「逢はじや」「逢はゞや」の誤ではなからうか。としてゐる。○妻戸端戸の義。寢殿造りの殿の四隅主客の出入する口に立てた兩開きの板戸をいふ。内外ともに鐵具があつて、開く時は外方へ開きその戸のあふらないために掛鐵をかけてとめておく、これを「さるつなぎ」と名づける。閉ぢる時は又内にかがれがあつてしめておく。精粗さまざまあるが、いづれも厚板に鐵具をつけて堅固にするを常とした。○やはら搔放つ音すなり、やはらはやならともいふ、しづかにの意。音すなりのなりはすといふ終止形からつゞいてゐるので咏嘆の意をあらはす。「秋の野に人まつ蟲の聲すなり」の類。

男ども少しやりて、透垣(一)のつらなる群薄(二)の繁(三)き下に隠れて見れば、「少納言の君こそあけやしぬらめ、出でゝ見給へ。」といふ。よき程なる童(四)の、容體(五)をかしげなる、いたう姿(六)え過ぎて、宿直(七)姿なる蘇芳(八)にやあらむ、艶(九)やかなる袍(一〇)に、うちすきたる髪(一一)の裾、小袿(一二)に映(一三)えてなまめかし。月の明き方に、扇をさしかくして、「月と花とを。」と口ずさみて、花の方(一四)へ歩み來るに驚かさまほしけれど、暫し見れば、おとなしき人の、「するみつはなどか今まで起きぬぞ、辨の君こそ此所なりつる、參り給へ。」といふは、物へ詣づるなるべし。ありつる童は留るなるべし。「佗しく

こそ覺ゆれ。^(四)さばれ唯御供に參りて、近からむ所に居て、御社へは參らじ。」などいへば、「物ぐるほしや。」などいふ。皆仕立てゝ五六人ぞある。下るゝ程もいと惱しげに、これぞ主なるらむと見ゆるを、よく見れば、衣脱ぎかけたる容體、さゝやかにいみじうこめいたり。物言ひたるも、らうたきもののゆゑくしく聞ゆ。嬉しくも見つるかなと思ふに、やうく明くれば歸り給ひぬ。

(考異) (一)つらなる群薄の つらなる 群薄の信友校本書入。(二)月と花とを口すきみ 月と花とを口すきみ大野廣城舊藏本。(三)歩み來るに歩み來る信友校本。(四)さばれ唯御供に さばれ御供に信友校本。(五)主なるらむと 主ならむと信友校本。(六)ゆゑくしく ゆゑくし信友校本いふくし宗固自筆本。

【通釋】 少將は供の男を少し遠くへやつて、透垣のもとにある群薄の繁つてゐる下に身をひそませて見てゐると、「少納言さん、もう夜が明けたのでせうか、出てみなさい。」といふ聲がする。やがて姿つきのかにもよい、年頃の女の童が、大層もめくちやになつて、宿直着であるのであらうか、蘇芳色らしい美しい袍を着て、その上に小鞋をきてゐるが、よくすきけづられた髪の毛のさがその小鞋に映つて實になまめかしい。この女の童は月の光を扇でさしかくして、「あたらしい夜の月と花とをおなじくば心しれらむ人に見せばや。」などと、この美しい月ときれいな花とを獨りで見るは惜しいといふ風に口吟みながら、花の方へ近づいて來るの、聲をかけて見たく思つたけれど、そのまゝ暫く見てゐると、年とつた女の聲で「季光はどうしてまだ起

きないのだらう。辨の君、あなたはこんな所にあるのですか、さあ一緒に御詣りなさい。」など言つてゐるのは、多分物詣でもするのであらう。少納言の君は、家に留つてゐるのであらう。「あゝつまらない。でもいつそのこと御供にだけ行つて、御社の近くに待つてゐて、御社には参りますまい。」といふと、「そんな氣狂じみたことを言ふものではありません。」などといふ。全部で五六人である。階段を下りて、車に乗るのも難儀さうにしてゐる人がそれがこの女主人だらうと思はれる。よく見ると、上着をぬきえもんの襟に着てゐる姿つき、小柄の體で實に愛らしい。言葉つきなども可愛らしいが、どこかにをかし難いところがある様にも聞える。少將はいゝ所を見たものだと思つたが、次第に夜が明けて來たから家に歸られた。

【語釋】 男ども少しやりて 従つて來た男を少し脇へ遣りての意。男は召使の侍、仲間などないふ。○透垣 垣の一種

竹又は板で間を少しづゝ透かして作つた垣をいふ。併し今の四つ目垣といふは透垣ではない、昔の籬といふので、又まぜともいふ、これは間がひろくあいてゐる。○群薄 花櫻咲く春に群薄とは時候があらぬ。○少納言の君こそ 少納言

の君とは女房の呼名である。父とか兄とかいふやうな後見する人が少納言であつたのである。清少納言などいふも後見した少納言の誰かはわからぬがこの例である。こゝそは係辭のこゝそではない。呼びかけのこゝそで人名の下につける接尾語である。源氏夕顔「右近の君こそまづ物見給へ。」などの例が澤山ある。○よきほどなる童 小さからず大さからぬ童。○

容體をかしげなる 容體はさまかたないふ。をかしげなるは美しげなるの意。○いたう萎え過ぎて 萎えるは着馴れて柔かになるをいふ。着馴れて大層柔かになつての意。○宿直姿 宿直の時のいでたち。○蘇芳 蘇芳の木を煎じて

染めた色、暗黒色を帯びた紅色である。○栞 間籠の義、上衣の下に着籠む衣で後世の小袖に當る。長さは普通の衣よ

り短く、幾枚も重ねて着る。男女共に用ゐる。地は綾、裏は平絹。色は紅・蘇芳・萌木・薄色などある。種類には單、袷、綿入などあり、極暑には用ゐない。○小袷 婦人の服で、表は浮織物、裏は平絹、廣袖で色は一定せず。下に打衣と單とを重ねて着る。唐衣・裳などを着ない時用ゐるが普通とする。

○扇をさしかくして 扇をのほにの意。聲などする折は袖をふたぎて。或は逢阪にあふや乙女を路問へば。などのなと同じ。

○月と花とをとりすさみて 後撰卷三、源信明

月の面白かりける夜花を見て、「あたら夜の月と花とな同じ

くば心知れらむ人に見せばや」とある、この古歌を口吟ん

での意。○驚かさまほしけれど 聲をかけたいけれどもの

意。○おとなしき人 おとならしい人の意。○物へ詣

づるなるべし 物といふは或る場所、出向いて行くべき場

所をさす。察するに何處か宮参りでもするのであらう。社

寺などへ参詣するを物詣でといふ。○ありつる童は留る

なるべし ありつる童は少納言の君をさす。少納言の君は

参詣せずに家に留つてゐるのであらう。○佯しくこそ覺

ゆれ ほんとにつまらない事だ。○さばれ さもあらばあれに同じ。

○下るゝ程も 階段から下りて車に乗るの意。○これぞ 惱ましげなる人をさす。

○衣脱ぎかけたる容體云々 衣脱ぎかけたるといふは、上衣が肩にぬぎかけたやうにぬきえ、人に着たので一寸いきの着方である。こめいたり



小 衵 の 圖

こめきたりの音便で小供らしいといふこと、餘り身體が大きくなはないのな。身體の小さいのがやさしく女らしく見え
たので、當時の美人の一つの標準とされたものである。○らうたきもののゆゑ／＼しく聞ゆ らうたきは愛らしきない
ふ。もののはものながら、とはいふもののといふ意。ゆゑ／＼しはもの／＼しいことでどことなし威嚴のあるないふ。

日ざしあがるほどに起き給ひて、昨夜の所に文書き給ふ。いみじう深う侍りつるも、道理な
るべき御氣色に出で侍りぬるは、つらさまいかばかり。」など、青き薄様に柳につけて、

知らざりし古よりも青柳のいとゞ今朝はおもひみだるゝ

とて遣り給へり。返事めやすく見ゆ。

かけざりしかたにぞはへし絲なれば解くと見し間にまた亂れつゝ

とあるを見給ふほどに、源中將・兵衛佐、小弓持たせておはしたり。昨夜は何所に隠れ給へり
しぞ、内裏に御遊ありて召ししかども、見つけ奉らでこそ。」との給へば、「此所にこそ侍りしか、
怪しかりける事かな。」との給ふ。花の木どもの咲きみだれたる、いと多く散るを見て、

あかで散る花みる折はひたみちに

とあれば、佐、

わが身にかつはよわりにしかな

との給ふ。中將の君、^(三)さらば甲斐^{かひ}なくや。」とて、

散る花を惜しむとめても君なくば誰にか見せむ宿のさくらを

とのたまふ。^(五)

(書異) (一)知らざりし　さらざりし　僧友校本以外の諸本。(二)かたにぞはへし　かたにぞはひし　藤井本。(三)さらば甲斐なくやとて　季花夢文庫本ナシ
(四)とめても　おきても　風葉集。(五)のたまふ　のたまひ　宗岡自筆本。

【通釋】　日が高くなつた頃に、少將は床をはなれて、昨夜の女に手紙を御書きになる。「まだ曉には程遠い夜中でしたが、つれないなさりかたでしたから早く歸つて來ましたが、實につらいことでした。」と書き、なほ「知らざりし古よりも青柳のいとゞ今朝はおもひ亂るゝ」など青薄様に認め、柳の枝につけておくつてやつた。女からの返事はきれいな字で、「かけざりしかたにぞはへし絲なれば解くとみし間にまた亂れつゝ」とあつた。この返事を見てゐるところへ源中將と兵衛佐とが供の者に小弓を持たせて遊びに來た。そして、「昨夜はどこへ行つてゐましたか。御所で音楽の御遊があつて、御召しになりましたが遂御さがしすることが出来ませんでした。」といふと、「此所に居りましたのに、それは變でしたね。」と少將は答へる。庭上に咲き亂たれ櫻の花がひらくと多く散るのを見て、中將が、「あかで散る花見る折はひたみちに」と上の句をよめられ